10/22/2001

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊＊＊　S.Ashina

第一章：文化から自然へ

第二章：自然神学の諸問題

序：キリスト教思想と自然の問い－アインシュタインの宗教論を手がかりに－

第三章：キリスト教思想と環境倫理

EXKURS　2：ティリッヒとエコロジーの問題

3：P・ティリッヒの科学論とその現代的意義　10/29, 11/5

第四章：近代科学とキリスト教

1：近代キリスト教の歴史的状況（前回）

２：神学者ニュートンと自然神学

2－2：ニュートンの自然哲学・自然神学

1. 錬金術研究：
   錬金術的自然哲学：能動的原理の探求　cf.機械論的自然哲学
2. **ニュートンは錬金術の中で機械論哲学との妥協を拒否するもう一つの考えに出会った。機械論哲学が物質は不活性であり機械的必然性のみが物質の運動を規定すると主張したのに対して、錬金術は自然現象の第一要因として物質における能動的原理の存在を主張した(Westfall[1980], p.299)。**
3. 植物的と機械的、あるいは能動的と受動的という異なった自然哲学的な諸原理全体を統合する神の支配
4. **機械的化学と植物的化学とのニュートンによる区別は、ニュートンのデカルト的遺産によって生じた神学的問題の解決にとって決定的なものとして現れた。機械的化学は単に粒子の機械的な衝突と分離によって説明されるかもしれない。しかし、植物的生長によって自然が産出するすべての存在者の偉大な種に対しては、我々はさらにそれ以上の原因に頼らねばならない。究極的に原因は神である。植物的化学の領域の内に、世界と物質の継続的な神的手引きの領域、つまり摂理的配慮の領域が見いだされるかもしれない。神の意志こそが物質の諸粒子の運動を方向付け、またそれらを秩序づけられた配置へと導くのである(Dobbs&Jacob[1995], p.30)**

5. **主なる神＝有神論的な人格神**
6. **ニュートンの神は単なる哲学者の神、つまり、アリストテレス主義の非人格的で無関心な第一原因ではなく、あるいはまたニュートンにとって神はデカルト的な超然とした世界に不在の神ではない。いずれにせよ、ニュートン自身がそうあることを欲した神は、聖書の神であり、神によって創造された世界の有効な主にして支配者なのである**(Koyré[1957], p.225)

7.　理神論とニュートン主義、ライプニッツとの論争

２－３：ニュートン神学の諸問題

⑴ ニュートン神学の構造

8. 神の統治：自然の秩序においてばかりでなく歴史の秩序の中にも顕わ

→　神の支配という観点から歴史を解釈（歴史神学、聖書解釈）

9. 二つの書物(the two books)：自然神学と啓示神学との関係

10.　**二つの書物のニュートンによる分離は科学は宗教の教義的内容について語るべきものを何も持たず、また聖書は王立協会の会話において引用されるべきでないということ以上を意味しないように思われる。他の点では、二つの書物は様々な仕方で結びつけられた。……二つの書物は価値において同等であった。……一方において顕わにされた神についての知識はすべて他方において明らかにされたことと調和していた(Manuel[1974], p.48)**

11.**「自然と聖書の両者における神的真理の単純さ」という理念**

真理は単純さにおいて見いだされねばならないのであって、多様性や事物の混乱においてではない。肉眼に対しては諸対象の非常に大きな多様性を示す世界が哲学的知力によって調査される際にその内的構成においてきわめて単純に見え、しかもよりよく理解されることによってそれだけより単純に見えるように、それは預言のヴィジョンにおいても同様なのである。神の働きすべてが最大の単純さによってなされたということが、神の働きの完全性なのである。神は秩序の神であって、混乱の神ではない(Yahuda MS.1.1,fol.14,in:Manuel[1974] p.120)

12.聖書：物語的歴史と生ける神の言葉としての直接的な証言

13.　**私は次のように確信している。これ（預言書についての論考：論者補足）は、使徒がバプテスマ、手を置く儀式、死者の復活、永遠の裁きについて説明しているようなキリストの教えの諸原理に満足して座しているのでは真のキリスト者たる者には不十分であると考えている人々にとって、大いに有益であるとわかるであろう。このような人々はこれらのような諸原理を後にして完全さへと進むことを望むのである(Yahuda MS.1.1.fol.1, in: Manuel[1974], p.107)**

精一杯努力してこれらの預言を探求することが我々の義務である(Yahuda MS.1.1. fol.3, in: ibid., p.109)

14.**ニュートンは預言書解釈**

①ダニエル書とヨハネ黙示録のできるだけ完全なテキストを確立すること（本文批判）。

②預言書におけるイメージや象徴について、それに対応する歴史的、政治的、教会的な対応物の辞書を作成すること。

③預言書の共時的ヴィジョンの作成。

15.「事物を最大の単純さに還元するような構成（解釈）を選択すること」、「真理は単純さの内に見いだされねばならない」（Yahuda MS.1.1, in:ibid., p.120）

16.三一神論の教義の捏造とそれに合わせた聖書テキストの改変

17.　こうしてわかるように、これらの教父たちがこの語（ホモウーシオス：論者補足）を取り上げたのは伝統からではなく、エウセビウスの手紙からだったのである。こ

の手紙でエウセビウスはその語をアレクサンドロスの教義からの帰結であると主張しているが、彼はその教義が教会の大多数の意見から隔たっており、これらの教父たちさえもそれを認めないだろうと考えていた。しかるにこれらの教父たちはそれがアリウスに対立するという理由でこの語を選んだのである」(Yahuda MS 2.5b, ff. 40-41, in: Westfall[1980], p.314)。

19. 4～5世紀の正統教義の形成期に元来徹底的な一神教であったキリスト教が三位一体という擬似的多神教（偶像礼拝）へ堕落したという認識　→　徹底的な一神教の回復

20.ニュートンのアリウス主義

21.問題の真の在処を問わずに、「認知された一連の範疇 ── アリウス主義者、ソッツィーニ主義者、ユニテリアン、理神論者 ── の一つに分類整理するために、ニュートンの反三位一体主義を利用するのは誤りである」（Manuel[1974], p.58）

22. 神という言葉は神の形而上学的な本性にではなく神の支配に関係している。それは相対的な言葉であり、神の僕としての我々に対して関係している。この言葉は、主や王と同じ意味を有しているが、より高い度合いにおいてそうなのである。なぜなら、我々は、我が主、我々の主、汝の主、他の主たち、王の王、主の主、他の主たち、主の僕たちと言い、他の主たちに仕えるように、我々は、我が神、我々の神、汝の神、他の神々、神の神、神の僕たちと言い、他の神々に仕えるからである」(Yahuda MS.15.7, fol.154r, in: Manuel[1974], p.22)

23. ホモウーシオスは形而上学的統一つまり実体の統一によって父と子を一つの神とした。ギリシャの諸教会はホモウーシオス的な形而上学的神性だけでなく、アリウス的な形而上学的神性をもすべて拒絶し、モナルキア的統一つまり支配の統一によって父と子を一つの神としたのである。この支配の統一においては、子は父からいっさいを受け取り、父に従い、父の意志を行使し、父の座に座り、父を自分の神と呼ぶのである(Yahuda MS.15.7, fol.154r , in: ibid.., p.58)

24. 「このプラトン主義と形而上学とに関係するいっさいを、わたしは理解しない。……聖書は人間に形而上学ではなく道徳を教えるために与えられたのである」(Yahuda MS.15.7, fol.190r, in: ibid., 72)。

（2）ニュートンの黙示文学解釈と終末論

25.『ダニエルの預言とヨハネ黙示録についての所見』（＝『所見』）のポイント

①聖書解釈の方法と聖書の統一性

「ダニエル書は数度に分けて書かれた文書が収集されたものである」(ibid., p.10)

「モーセ、ヨシュア、士師たちの諸文書には、創造からサムソンの死までの連続的歴史が含まれている」こと（ibid., p.6）、さらに「神は、後世において賢明な者がそれを理解し、よこしまな者がよこしまなことを行うように、諸預言を秩序づけた」(ibid., p.14)

「皇帝や王や王子たちの権威は人間的である。公会議、宗教会議、司教、長老たちの権威は人間的である。預言の権威は神的であり、宗教の全体を包括している。この場合、預言の中にはモーセと使徒たちが数えられるのである」(ibid.)。

②聖書解釈と神観念（絶対的一神教）

「もし、キリスト教徒がヘブライ人の教えを堅く守るのであるならば、彼らは多くの神々や一人

の人間の代わりに一つの神を礼拝したであろう。まして、多くの不幸な人間たちを礼拝しなかったであろう」(ibid.,208)
「ダニエルの諸預言はすべて相互に関係づけられている。あたかも、それらが一つの一般的預言の諸部分にすぎず、数回に分けて与えられたかのようにである」(ibid., p.24)
「ヨハネ黙示録はダニエルの諸預言と同じ様式と言語によって書かれており、ダニエルの諸預言が相互に持っているのと同じ関係をダニエル書に対して持っているのである」(ibid., p.254)

③正統教会・正統教義への批判

すべては、結婚の禁欲を聖化した修道士と修道女によって、ギリシャ帝国（東ローマ帝国）の全体にはびこるようになったもの、そして聖人への祈りやその遺物の崇拝に関わっている。こうした迷信はこれらの人によって、4，5世紀に導入されたのである(ibid., p.192)

これはキリスト教的宗教における殉教者崇拝に向けてなされた第一歩であった。それは、まだ不法な礼拝には至ってはいないものの、キリスト教徒を死者の崇拝へと促し、ほどなくして、聖人への祈りとなったのである(ibid., p.205)

④聖書解釈から歴史解釈へ

「預言を理解するために、まずわたしたちは預言者の言語に習熟しなければならない。この言語は自然と帝国あるいは世界国家と考えられた王国との間の類比から取られている」(ibid.,p.16)

4つの金属のよって構成された表象の幻の中に、ダニエルの全預言の基礎がおかれている。それは、継起的に地上を支配する4つの偉大な国家群、つまりバビロニア人、ペルシャ人、ギリシャ人、ローマ人を表している(ibid., p.25)

4頭の獣という次の幻においては、4つの帝国についての預言が、いくつかの新しい付加を伴って繰り返されている。つまり、ライオンの二枚の翼、熊の口の三本の肋骨、豹の4枚の翼と4つの頭、第4の獣の１１本の角、そして天の雲に乗って到来する人の子、審判に座する日の老いたる者といったものである(ibid., p.28)

⑤ニュートンの終末論

キリストの二度目の到来において起こる事柄に関する多くの明らかな預言は、予言を行っているだけでなく、長い間失われていた真理の発見と再確立をもたらし、正義がそこに住まう王国をうち立てることをも目指している。出来事は黙示録を証明するであろう。こうして証明され理解された預言は古い諸預言を開示し、それら全体は真の宗教を知らしめ、確立するであろう。なぜなら、古い預言を理解しようとする者はこのことから始めねばならないからである。しかし、古い諸預言を完全に理解するための時はまだ至っていない。というのも、それらにおいて予言された多

〈の革命はまだ過ぎ去っていないからである(ibid., p.252)